

男性（40代）禁煙年齢・40代

「本当ですよ。財布から小遣いが減らないんです。」

少し疑ってみせた私に、後輩のSは口を尖らせて言った。

Sは長年吸い続けた煙草をスパッと止めた話を自慢気にするような男ではなかった。ただただ、コンビニへ煙草を買いに行かなくなったので、余分な買い物までもしなくなったと力説していたのだった。

私とSは、互いに妻が専業主婦の、いわゆる「一馬力」の家庭の主である。そのため、毎月の給料から受け取る小遣いは多寡が知れていて、情けないが甚だ手元不如意であることが常なのである。それがなんと、

「小遣いが減らない」

というのであるから、我が心が動かぬはずがないではないか。その時、私の頭の中には、ライフワークにしようと考えている「木工」で、どうしても必要になる電動工具の名前が次々と現れていた。

Sの魅力的な科白は私の頭の中で日に日に大きくなっていき、今まで決して考えもしなかった禁煙を真剣に考えさせ、決断させるまでになっていった。

といっても、何の手立てを講じることなく禁煙に挑むほど、自らの意志の力は自信がもてるものではない。そこで、転ばぬ先の初期投資として、禁煙ガムを買い求めることにした。

それにしても小遣いという動機は絶大なパワーがあり、目標に向かって大して苦しみもがくことなく一ヶ月、私はすでにガムを持たずに生活できるようになっていた。そして、三ヶ月、半年、煙草を買ったつもりで小遣いを入れていた禁煙貯金の缶は、どんどん重さを増していった。

禁煙一周年の祝いのケーキを家族とともに味わった後、ズッシリと重くなった禁煙貯金の缶をわくわくしながら開けてみた。子どもの手を借りて十八万円余りの小銭を数え終わった時、私は家族から賞賛の言葉を受けつつ、また、湧き上がる達成感と威厳を保てた安堵感で晴れやかな気持ちに浸っていた。その時の私の座布団の下には、赤いマジックで丹念に〇印がつけられた電動工具のカタログが少しくたびれながら待機していた。

夢にまで思い描いていた電動工具を手に入れた私は、ふと一年前までの自分

を振りかえって気がついたことがあった。

私が私の意志によって煙草をプカプカとふかしていたのではなく、本当は煙草によって私の心がしばられて行動が支配、制限されていたのではないかと。

以前の私は、自宅、職場、鞆や自動車の中などに、いつでも煙草の買い置きがなければ不安になっていた。煙草がないということが恐ろしいことででもあのように注意を払い続けていた。

また、仕事の合間の休憩時間になると、あたかもそれが義務でもあるように建物の一番端まで急いで、ご同輩諸氏と煙草を嗜む者の不遇を嘆きながら紫の煙をたなびかせたものだった。

それらの情けない様子とともに、私の財布の中に僅かしかない紙のお金が煙と化すために定期的に減り続け、趣味の雑誌やつきあいの馬券など、ちょっとした欲しい物にも自ら我慢を強いて生活をしなければならない有様だった。

現在は、煙草をやめたというよりも、煙草の「呪縛」から解き放たれたような気分になっている。

買い置きがなくなることに心を配ることがない、休憩時間に喫煙場所に足を運ぶことがない、といった少年時代のような自由を取り戻すことができたのである。

Sが言っていたように、たとえ僅かな小遣いであってもささやかな豊かさを感じられるようになった。そしてそれは、給料前に余力として残るようになり、誰に悟られることなく男のための緊急時に備えた「機密費」として、徳川埋蔵金のように免許証の裏側に保管されるようになった。

「煙草が好きなんです。」

などと公言して恥じなかった私は、志半ばで煙草を吸いつづけることをやめた、ある意味において意志の弱い男である。しかし、私は本当に煙草が好きではなかったかもしれない。ただ単に、禁煙を成し遂げる自信のなさを隠して惰性で吸っていただけなのかもしれない。

それは、今、煙草の値上げに腹を立てながら買い置きを求めようと、自動販売機に小銭を入れたおとうさんのように。